研究ノート

チャハール・バーグの形成とムガル庭園の系譜

古橋　達弘

はじめに

造園はムガル朝でよく行われており、ムガルの「庭園墓廟」という範疇からみれば、庭園と建築物を全く別のものとして捉えることは難しい。それぞれが別の発展・展開をしてきたはずのものが、ムガル朝第２代の皇帝フマーユーンの廟において融合され、以降それが重要度を増してくる。

しかし、庭園を考察する過程において、どうしても理解に苦しんだのが、イスラムの楽園を示す根本的な様式「チャハール・バーグ　Chahar Bagh」である。チャハール・バーグについては、イスラムの楽園思想を反映するとして思想面からの考察が多くなされており、成果は上げられている。しかし、あまりにも思想面が強調された故か、その形式については未だ深い考察がなされていないように思われる。チャハール・バーグは一般に「壁に囲われた庭園を４分割にしたペルシア起源の庭園」と定義されるが、その中で一体何がチャハール・バーグを決定しているのか、それすらも判らない。庭園を壁で囲うことも、庭園内を（４つとは必ずしも言えないが）分割することもイスラム以前に行われていたはずである。そこで、チャハール・バーグの要素を「壁に囲われた庭園」と「分割された庭園」、「楽園思想」の３つに分け、それぞれの歴史を追うことから始めた。この過程でもう一つの要素「水路」に気付いた。水路は必ずしもチャハール・バーグに現れるものではないが、後の造園技術の発展には欠かせない要素の１つであることが判った。

また、造園技術・職人の観点から、もう少し何か具体的なものはないのかと探るうちに『イルシャード・アル・ズィラーア』(中世の園芸書)に行き着いた。『イルシャード・アル・ズィラーア』は、ムガルの始祖バーブルと同時代に編纂された書であり、これを用いてムガル朝のチャハール・バーグや庭園墓廟に繋がる系譜を探り、その様式と形成過程を検討するのが本稿の主な目的である。

壁に囲われた庭園

スパルタの提督リュサンドロス Lysander（?-395 B.C）がペルシアの王子キュロス Cyrus the Younger（c.424-401 B.C）を紀元前407年に訪問した時の記録や、ギリシアの歴史家クセノボン Xenophon（c.430-c.355 B.C）がキュロスの庭園を紀元前401年に記述した内容からすると、壁に囲われた庭園はその当時には既に存在していたことになる〔Moynihan　1979：1-2〕。それがどの

ような庭園であったかの明確な記述はなされていないものの、paradise の語源である pairidaeza（pairi 周囲＋ daeza 壁）をキュロスが自らの庭園を表すために用いたという表記が現れる点で、「壁に囲われた庭園」の一応の起源として考えてよいのではないかと思われる。

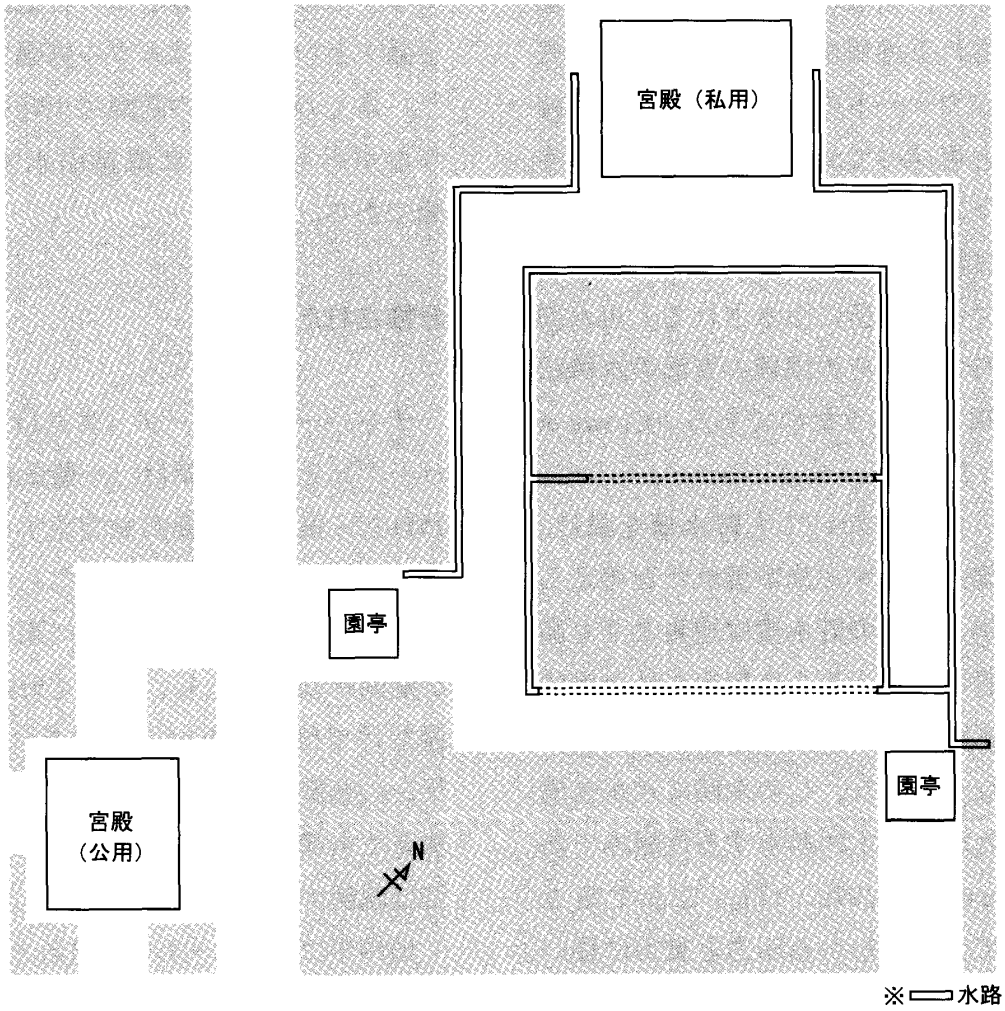
ある一定の区画を壁で囲うという行為は、人間からの攻撃や動物の襲撃を防ぐという目的と、厳しい自然環境から隔絶することによって区画内を保護し、内部の環境を改善するという目的があったと考えられる〔Moynihan　1979：10〕。ペルシア起源の庭園は当初から外界を遮断し、内部に快適な空間を作る目的があった。

灌漑設備と水路

アケメネス朝下において、農業の促進と同様、囲われた庭園に給水するために灌漑設備が発展した〔Moynihan　1979：14〕。

アケメネス朝の始祖キュロス２世 Cyrus the Great（600?-529 B.C）の創設した都市であるパサルガダエ(Pasargadae:c.546B.C ）には水路によって給水される庭園がある〔Moynihan　1979：14-16〕。この庭園は、壁に囲われ、給水設備を備え、さらには園内に宮殿や園亭を有する庭園の最初の例で

図１　パサルガダエの庭園



出所：ブルックス 1989: 35, Moynihan 1979:17 から作成

あると言えるだろう（図１）。しかし、その庭園のような覆いのない明渠を用いて灌漑することが可能だったのは河川の周辺地域やオアシス地帯に限られ、乾燥した気候の中では水の蒸散が速く、河川やオアシスにある水を遠くに運ぶことは困難であった。そのため、地下水源から水を引く地下灌漑設備であるカナートが考案され、ペルセポリス（500 B.C）ではすでにこの方法で灌漑されていた〔Crowe et al.　1972：30-31〕。

カナートによって河川やオアシス近郊以外にも都市や庭園を建設することが可能となったことは想像に難くないが、その設備が庭園に与えた影響を示す資料に未だあたらない。この件に関しては今後の課題として残しておく。また、カナートはその構造上、使用される地域が限定されるので、庭園の全てがカナートの影響を受けたとは言えないことを述べておく必要があるだろう。

カナートにより運ばれた水は一度貯水槽やため池に集められ、そこからさらに水を必要としている場所に引水される。渇水期にはその貯水池がその地域の当面の水供給源として用いられるためである〔Crowe et al.　1972：32〕。

同様に、庭園においても貯水槽を設け、そこから園内に流す方法が現れたと考えられる。通例、園内の貯水槽は地表よりも高い位置に設けられ、そこに集められた水は一段下の水路に落ち、水路もまた地表より一段高くなっており、この水路に水が充満すると溢れ出て草木に給水する仕組みである〔Crowe et al.　1972：17〕。こうすることによって、水にかかる圧力と重力に従い、労力を使わずして自然と水を庭園内に行き渡らせることができる。この灌漑設備は、給水方法と庭園構成において、新しい形式をもたらしたと考えられる。これが庭園に与えた影響は少なくはない。この水路によって庭園は自然と分割されることにもなるからである。

地下を通して水を園内に供給するという方式を用いることによって、近隣に水源のない土地であるにも関わらず、庭園内に水が燦々と溢れ出る様を演出することが可能となった。考えてみれば、外界との隔絶を果たした庭園（すなわち楽園）が世俗世界の水（河川水など）を引いている、という事実を目の当たりにしてはその庭園は興ざめである。楽園には楽園内において完結しなければならない現象を求めるのは当然である。この地下水路を用いて庭園外の水路を隠すという方法はムガル庭園でも好まれた。多くのムガルの庭園は川畔や湖畔にありながらも、園内に直接引水することは稀である。

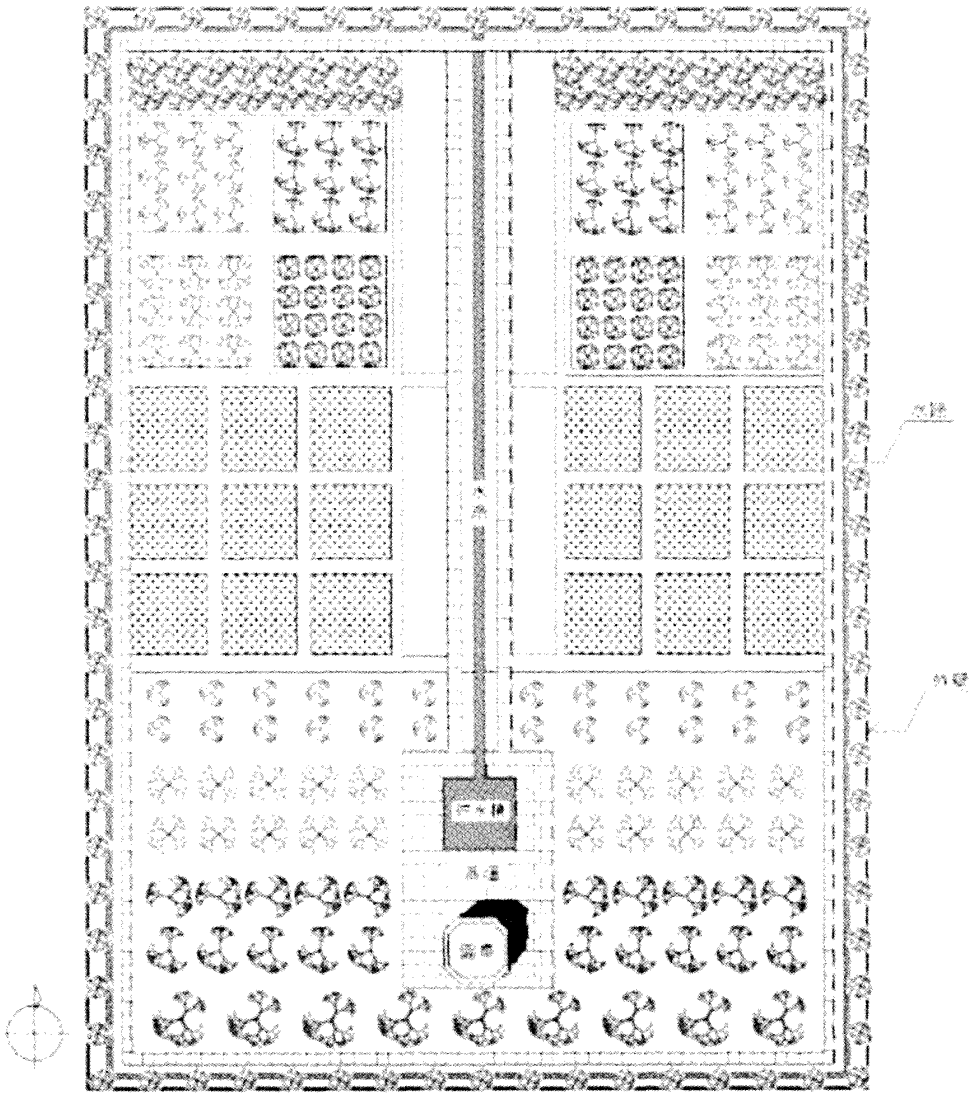
分割された庭園

チャハール・バーグ（またはチャール・バーグ）という術語は、一般的に、壁に囲われた一区画の庭園内を交差する歩道によって４つの部分に分けられたものと説明される。しかし、それが本当に正しいかどうか疑問が残る。もし、この４分割という定義だけでは不足というのであれば、「コーランの楽園思想を反映する」という定義を加えても構わない。いずれにせよそれだけでは説明のつかないことがあるのだ。

1515年に、ヘラートで著されたカシーム・ナスリー Qasim ibn Yusuf Abu Nasri の園芸に関する指南書『イルシャード・アル・ズ

ィラーア *Irshad al-zira'a*』の第８章に「チャハール・バーグの地取りと植物の植え付け」というのがある〔Subtelny　1997:110〕。Subtelny がその記述に従い、それに示されるチャハール・バーグの再現を試みている〔Subtelny　1997：127〕が、その全体を見るに「４分割」という概念のみでチャハール・バーグを説明することが不可能であることが判る（図２）。もしそれが単に歩道によって４分割されたものを指すとすれば、園内を散策するために敷設された通路が偶然にもその庭園を４分割することだってありえる（そうであれば、今日我々が認識しているチャハール・バーグの概念は完全に後付けされたものであることが証明される）。であるから、過去に遡るだけ遡って４つに区切られた庭園を見つけたからといって、それがチャハール・バーグであると一概に言うことは出来ないはずである。付け加えるならば、現存する最も古いチャハール・バーグの例としてあげられる庭園にも諸説あって定説がない状態である。

図２　カシームのチャハール・バーグ復元図



出所：Subtelny 1997:127 から作成

楽園思想とチャハール・バーグ

チャハール・バーグはコーランの楽園思想を反映したものとしても、チャハール・バーグの、その庭園自体は初めからそれを模すために特に造られたものとは考えられない。庭園を楽園としてみなす思想は、楔形文字で書かれたシュメールの神話にまで遡ることができる。

「ディルムンは汚れなく清浄で晴朗な土地であった。その幸福な住民は、病も暴力も歳を取ることも知らなかったが、その土地は良い水に恵まれていなかった。水の神エンキは、地下から水の供給される神聖な庭園を創るよう太陽の神ウトゥに命じた。ウトゥは従い、ディルムンは果樹や草原、湿地のある神の楽園に姿を変えた」[1)]

この神話の誕生した背景には「厳しい自然環境を作り替える」苦労があった様が伺える。この神話に従って、というよりは伝統的にこの土地では水や緑が羨望の的であり、それらを満たす土地（庭園）を楽園と見なすのは至極当然なことである。イスラム教以前に庭園はすでに楽園のメタファーとして存在しており、またこの思想は脈々と受け継がれていたはずである。

イスラム教が浸透してかなりの時間が経過してもなお、例えばイルシャード・アル・ズィラーアの示すチャハール・バーグは、直接的にコーランに記されている楽園の情景と結びつかない。ましてや石の歩道で区切られただけの庭園からではなお容易にその楽園に結びつかない（砂だらけの土地で石を川と見立てることがどれだけ馬鹿げたことか）。よって、現在チャハール・バーグと言われている庭園の形式は（そうとは呼ばれていなかったはずであり、かつては別の名称があったのかもしれない）先に存在していて、後にコーランの示す楽園と結びつけられたものと考えられる。いつとは断定できないが、ある時代から「チャハール・バーグ」が造られるようになったはずである。恐らくは庭園が審美的に洗練された一定の段階において、イスラムの楽園を模すものと考えられるようになったのではないかと思われる。当初のチャハール・バーグは、他の庭園とはもっと類型的・形式的な区別がされていたはずである。他の庭園と一線を画す様式や概念が存在していたはずであり、それがいつからか楽園思想に沿うように発展し、今日の宗教的楽園思想を含んだチャハール・バーグにとって代わられ、その当初の様式や概念が忘れ去られたのではないだろうか。

術語「チャハール・バーグ」の成立年代

チャハール・バーグという術語がいつ、どの時点から用いられ始めたのか不明である。確実なところでは、カシームの時代にはチャハール・バーグの様式や概念は確立され広く認知されていたように思われる。なぜなら、カシームはチャハール・バーグ以外の様式を認めていない。他のいかなる様式についても触れておらず、その中に述べられる庭園はチャハール・バーグとして理解されていたと考えられるからである〔Koch　1997：142〕。

チャハール・バーグはペルシア起源と言われているが、実際には、ペルシア地方の造園技術がティムールの統治下において一層発展し、後に「チャハール・バーグ」の

術語を与えられたのではないかと考えられる。

1370年にマー・ワラー・アンナフルを統一し政権を掌握したティムールは、その年代の遠征によってサマルカンドからモーグリスターンやホラズムに影響を及ぼし、自らの統治基盤を安定させた。そして1380年には、統一政権を欠き分裂していたイランに侵攻する。1386年にはタブリーズを、87年にはイスファハーンを経てシーラーズを手中にした。「タブリーズに、夏を過ごしたティムールは、占領地区の職人等のうち優れたものを選んでサマルカンドに送った」〔蒲生　1972：118〕。1392年からの戦役において、ティムールは1393年ムザッファル朝を滅ぼし、「イラン、イラクの優れた手工業者を、サマルカンドに送った」〔蒲生　1972：119〕。当時のサマルカンドは、ティムールが各地を占領し、その土地土地の優れた職人や石工をサマルカンドに送って自らの宮殿や都市の建設等に従事させたため、イスラム世界きっての技術水準によって造られた都市であった。また、このことは当時のイスラム建築の持つ殆ど全ての様式の混成によってサマルカンドが成り立っていたことをも示す。

ティムール自身イスラム教徒ではあったが、敬虔な信徒であったとは言い難い。彼が聖戦と位置づけていた遠征は、イスラム教徒が他のイスラム国家を征服するという、聖戦とはほど遠い行為であった。ティムールがこのような行動に出た理由は、遊牧民がオアシスや都市に定住することによってその経済基盤が安定することを知り、それらがもたらす経済効果に期待したからである〔小松　2000：219〕。彼にとってのイスラム教は宗教ではなく、自身の収入基盤を安定させるための手段であった。聖戦を掲げた領土の拡大は政治的・宗教的な意図によるものではなく、むしろ自らの領土を拡大することによって通商上の安全を確保し、首都サマルカンドの繁栄を計るためであったように思われる。このような環境の中で発展した庭園が何らかの思想を如実に表したものであるとは考えにくい。庭園は当代髄一の都市を彩る「一部分」にすぎず、何にもましてその規模や技術・工芸によって人目を引くことが第一ではなかっただろうか。

スペインの公使であったクラヴィーホ Ruy Gonzalez de Clavijo は1404年にサマルカンドに入った〔Golombek and Wilber 1988：8〕が、彼の記述にチャハール・バーグという術語は現れない。彼の記述には、ただ「庭園」とあり、ティムールのシャーリ・サブズの宮殿にあった庭園ですら「大庭園」と記されている〔Ruggles　1997:175〕。

ティムールはクラヴィーホ等への謁見を庭園で行っており、また彼らのために開かれた祝宴や宴は必ずといってよいほど庭園において行われていた。ティムールはクラヴィーホ等をバーグ・イ・ディルグシャー Bagh-i dilgusha（喜びの園）で迎えた後、数日経ってから宴会を催した。その会場となった庭園の名称は定かではないが、クラヴィーホは庭園の様子を以下のように記している。

「庭園は広大で、たくさんの果樹があり、木陰を落とす枝葉の張った高い木がある。散歩のために、並木道や木製の手すりで縁どられた小道が園内くまなく通じている…庭園の中央には、豪華な装飾を施した、十

字形の美しい屋敷が建っている…」〔リシュアン・ケーレン　1998：213〕

もし、クラヴィーホの時代にチャハール・バーグという術語が既に存在していれば、通訳を通じて知らされたはずである。それではクラヴィーホがチャハール・バーグを見ていなかったのか、あるいは当時それが存在していなかったのだろうか。また、クラヴィーホの見たティムールの庭園には各々固有の名称がつけられている故、それ以上の説明が通訳からなされなかった可能性もある。しかし、後のバーブルZahiral-Din Muhammad Babur（在位1526-30）の著作である『バーブル・ナーマ』にもティムールの造った庭園を指してチャハール・バーグという術語を用いていないことから、ティムール自身はチャハール・バーグを造らなかった可能性が高い。とすれば、クラヴィーホの訪れた1404年にはチャハール・バーグという術語どころかチャハール・バーグ自体が帝国内に存在していなかったと考えられる。

バーブル・ナーマには、1494年6月の記述に初めてチャハール・バーグが現れる〔バーブル　1998：38〕。バーブルの父であるウマル・シャイフ・ミールザーの急死を知らされたのはフェルガーナ地方の首都であったアンディジャーンの城外にあるチャハール・バーグにいる時だったと記されている。しかしながら、このチャハール・バーグに関してはこれ以上記されていない。

1497年11月下旬にバーブルはサマルカンドに入城した〔バーブル　1998：82〕が、その当時の街の様子を詳細に描写している。中でも、スルターン・アフマド・ミールザー Sltan Ahmad Mirza（在位1469-94）の時代に造られた庭園のうちで、ムハンマド・タルハン Darvish Muhammad Tarhan の庭園についてバーブルは「ダルウィーシュ・ムハンマド・タルハンのチャール・バーグほど美しく、気持ちがよく、またながめのよい庭園はすくないであろう」〔バーブル　1998：178〕と記している。

一方、バーブルがカーブル時代に築いたバーギ・ワファー（Bagh-i-Wafa）は、彼の記述によれば、「私は914年（1508/1509年）１つのチャール・バーグを造った。バーギ・ワファーの名で知られ、川を見下ろす位置にある…この庭園は高みにあり、流水も手近く、冬の気候もおだやかである。庭園の中央に１つのやや小さな丘がある。１基の水車を動かせるほどの水量の小川が、庭園の中央と、この庭園内の丘をたえず流れている」〔バーブル　1998：82〕（カッコ内は間野氏の注によるものを筆者が加えた）とある。

またバーブルは「バーグ（庭園）」と「チャハール・バーグ」の区別をしている〔Ruggles　1997:174〕。バーブルの言う「チャハール・バーグ」とは、ダルウィーシュ・ムハンマド・タルハンの庭園やバーギ・ワファーのようなものを指し、「バーグ」とはその様式以外のものを指していると思われる。しかし、その他の庭園がどのようなものであり、チャハール・バーグとの区別が何をもってなされているのか不明である。

イルシャード・アル・ズィラーアの作者であるカシームは、アミール・スルターン・マハムード Sayyid Nizam al-Din Amir Sultan-Mahmud, i.e., Mirak-i Sayyid Gyas（ミラク・イ・サイイッド・ギヤース。以後ミラク）から園芸の手ほどきを受けた〔Subtelny

1997：111〕。ミラクは1476-77年ヘラートに生まれ、スルターン・フサイン Sltan Husain（在位1470-1506）の宮廷に仕えた。彼の仕事は、スルターン・フサインの庭園と庭園に付随する建物などに対する建築の監督であり、また彼はチャハール・バーグの専門家でもあった〔Subtelny 1997:112〕。ミラクの造園技師としての技術はスルターン・フサインに高く評価され、非常な信頼を得ていたようである。

スルターン・フサイン自身も造園や農業に関心を示していたことは当時の歴史家の記述に現れている〔Subtelny 1997：112〕が、ヘラートにおける農業や造園技術の発達はスルターン・フサインの治世に始まったことではない。シャー・ルフ Shah Rukh（1377-1447）の治世にホラーサンにおいて灌漑設備が整えられた結果、その地域の耕作地は拡大した〔Subtelny 1997：113〕。アブー・サーイード Abu Sa'id（在位1451-69）の時代には、ヘラート地域の歴史地理学者であるイスフィザーリー Isfizari によれば、ヘラート北部の全地域は庭園や花園、庭園を観覧するためのバルコニーなどに変わっていた〔Subtelny 1997：113〕。このことは特にこの地域の興味が造園にあったことを示し、またその灌漑農業技術が特に造園に対して用いられていたことを示す。その後の造園に関わる大きな変化がなければ、このような周囲の状況を見たミラクの造園技術は、恐らく灌漑や植物の栽培方法に焦点を当て、洗練されていったものだと考えられる。ミラクから造園教育を施されたカシームは、その影響を多大に受け、それをチャハール・バーグという様式に集約し説明したと考えられる。ミラクがチャハール・バーグの専門家であったという記述は、実はイルシャード・アル・ズィラーアの中にある[2]。それ以前の文献上に確かなチャハール・バーグの記述がなければ、術語チャハール・バーグを初めて定義したのはカシームである可能性が高いが、現段階では明言は出来ない。ただし、当時の当該地域における一般的なチャハール・バーグを定義し、書として初めて著したのはカシームだとは言えるはずである。

以上から、チャハール・バーグという概念が確立され、術語として用いられるようになったのは、大雑把に言えば、クラヴィーホがサマルカンドに到着した1404年以降で、バーブル・ナーマに初めてチャハール・バーグが現れる1494年の間ということになる。そうすると、イルシャード・アル・ズィラーアが編纂された当時には最低でも20年が経過しており、既に一般化していたと考えられる。

ムガル庭園の系譜

バーブルはパーニーパットの戦いの後すぐにアーグラ入りをしたのだが、アーグラに入ったのは庭園を造るためであったらしい〔Nath 1982：86〕。1570年代の歴史家アフマド・ヤドガル Ahmad Yadgar やバーブルの記述を見ると、ムガル朝最古の庭園はアーグラに造られたようである。アフマド・ヤドガルは次のように記している。

「（インドにおける）治世第２年にハズラット・ギーティー・シターニー（すなわちバーブル）はヤムナー川畔に比類のない庭園を設けた。またそれはインドにおいて歩道のある地取りの初の例である。以前にそ

のような歩道のある地取りはインドでは用いられていなかった」[3]。

またその時の様子をバーブルは以下のように記している。

「常に私はこう考えていた：ヒンドゥスターンの１つの大きな欠点は人口の水路が無い事だ。どこであれ私たちが滞留する場合、水車を設置して水路を作り出し、設計図に従って作られた整然とした場所を作り出すことは可能であると。私は、アーグラ入城の数日後、この目的でジューン川[4]を渡って庭園に適した土地を見てまわった。何とも快適さに欠け、よい所のない土地ばかりで、私たちは非常な嫌悪感と共に、それらの土地を通り過ぎねばならなかった。これらの土地の不快さ、まずさの故にチャハール・バーグを作る気持ちは私の心から消え失せた。しかし、アーグラに近いところではこれ以外の土地はなかった。数日後、やむを得ず、この同じ土地に手を入れた。

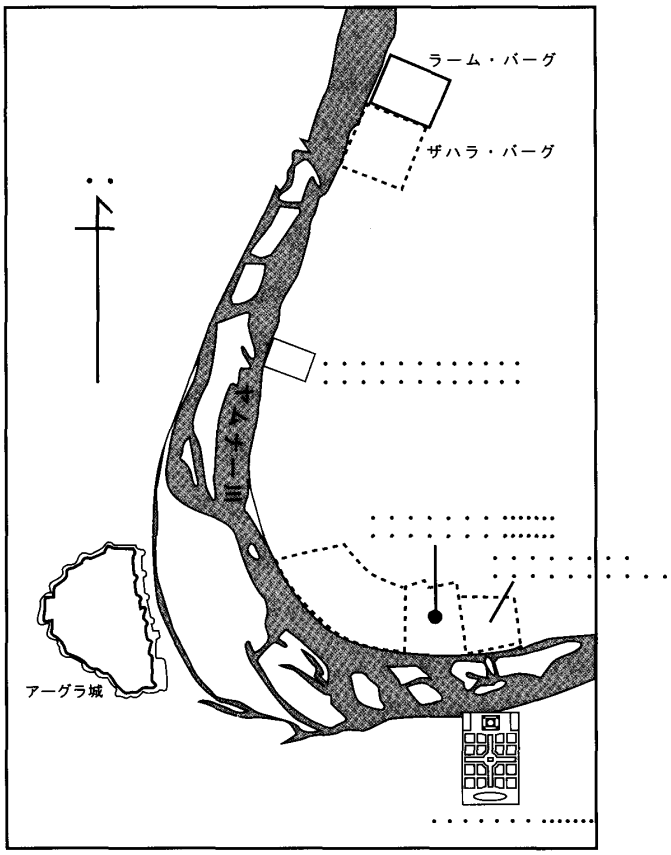
最初に公共浴場の水をとる大きな井戸が作られた。ついで、現在タマリンドと８角形の貯水場のある一角が作られた。その後で、大きな貯水場と庭が作られ、その後石造りの建物の前の貯水場とホールが作られた…」〔バーブル　1998：479〕。

これでチャハール・バーグをインドに持ち込んだのはバーブルであることは明白となったが、その庭園が具体的にどのようなものであったのかまでは判らない。その庭園は現存せず、最近までその場所すら特定できていなかった。ジャイプール・パレス・ミュージアムで近頃発見されたデーヴァナーガリー表記のアーグラの配置図によれば、その庭園はマハターブ・バーグ（Mahtab Bagh）に隣り合っており、今日のタージ・マハルの川向かいに当たる位置にある〔Koch　1991：33〕（図３）。アーグラのヤムナー川畔は、その後ムガル貴族によって多くの庭園や住居が建てられる人気の場所となる。ペルザートはアーグラについてこう記述する。

「至る所の木立ちの豊さが、都市と言うよりは王立の公園に似ており…、都市の幅は長さと比べて決して広くはない。なぜなら皆が川の土手近くにあろうとし、必然的に河岸地区は主立った領主の高価な宮殿によって占められるからである」[5]。

インドにおいて、形を確認できる最も古いムガル庭園は、アーグラにあるラーム・バーグ（Ram Bagh）であると言われている〔Nath　1982：91〕または〔Crowe et al. 1972：63〕。

図３　バーブルのチャハール・バーグの位置



出所：Crowe et al. 1972:63 から作成

Moynihanはジャハーンギールの記述を引用し、ラーム・バーグはかつてバーブルがグル・アフシャーン（Gul Afshan）と呼んでいた庭園であると説明している[6]。この庭園は後にヌール・ジャハーンが改修を行い、恐らくはその名を冠し、バーグ・イ・ヌール・アフシャーン（Bag-i-Nur Afshan）と名称をも変えられている。これではバーブルが造園した当初の様式が判らない。残念なことに、バーブルの造った庭園が完全な形で、あるいはチャハール・バーグの様式が判別できる形で残っておらず、また、バーブル自身の記述にも詳細に現れない。

造園に多大な興味を示し、自然を愛したバーブルがイルシャード・アル・ズィラーアを知らなかったとは考えにくい。ましてやそれがチャハール・バーグ造園の集大成であればなおさらである。

バーブルの死の僅か一年前、1529年にミラクはイラン出身の熟練した職人達、ムッラー・カシームMulla Qasim、ウスタード・シャー・ムハンマドUstad Shah-Muhammad Sang-tarash、ミール・サングタラーシュMir Sang-tarash、シャー・バーバー・ビルダールShah-Baba Bildarと共にバーブルの雇用下に入り、建設事業に従事した。さらに、恐らくはカシームをも連れてやって来た〔Koch　1997：142〕。カシームを除く、ミラクと共にインドにやって来た成員の名前はバーブル・ナーマにも現れる。

「（1529年２月１日）火曜日、カーブルへ行く者たちに、手紙を書いて託し、出発を許可した。また、アーグラとダウルプルで建築している建物のことを思い出し、ムッラー・カースィム、石工ウスタード・シャー・ムハンマド、ミーラク・ミール・ギヤース、石工ミール、すき掘り人夫シャー・バーバーをこれらの完成のための責任者に任命し出発させた」〔バーブル　1998:570〕（カッコ内は間野氏の注によるものを筆者が加えた）。

しかし、理由も時期も定かではないが、程なくしてミラクはまたブハラに戻ってしまう〔Subtelny　1997：114〕。わずかの期間のこととはいえ、ミラクが直接関わっていたことは、ミラクの技術・様式がインドに持ち込まれている証拠である。

ムガル朝第２代の皇帝フマーユーンは、波乱の人生を送り、注目に値する庭園を造っていないが、彼の墓を構成する要素の１つである庭園は別である。

これまで、フマーユーンの墓廟はミラクの手によるものと思われていた。Nathもその１人で、アクバル治世の年代記の１つであるバダウニーBadauniの『ムンタカーブ・アル・タワーリーク*Muntakhab al-tavarik*』の記述を用いて説明している。「デリーの川畔にあり、ミラク・ミルザ・ギヤースが建てるのに８年か９年を要した」[7]。

しかし、Moynihanはより確実な史料をもとに、フマーユーンの墓廟の建造者はミラクの息子ムハンマドSyyid Muhammad-i Mirakであることを証明した。Moynihanは1566-67年に書かれたハサン・ニサーリーHasan Nisariの『ムザッキル・イ・アハバーブ*Muzzakkir-i ahbab*』の記述から「ムハンマドはムガルの皇帝アクバルにフマーユーンの墓の建設を任された」〔Subtelny　1997：114〕ことを表し、またブハラに残っていた売買証書からミラクがフマーユーンの墓の建設当時には死亡していたこと

を示した。

「一部の建築史家は、ムンタカーブ・アル・タワーリークに基づいて、（著者バダウニーが誤ってミラク・ミルザ・ギヤースと述べているため）フマーユーンの墓の建造者であったのはムハンマドではなく、彼の父親であったと主張し、他は彼の父親によって始められた事業をムハンマドは完工しただけであるという少し修正された見解を示した。しかしながら、ミラクとブハラで会っていたミラクと同時代の者によって書かれたムザッキル・イ・アハバーブは、少し後のムンタカーブより明らかに勝った文献である。さらに、ミラクがフマーユーンの墓の建造者ではなかったという決定的な証拠は、予想だにしなかったが、ブハラのジュイバーリー・シャイフ（Juybari Shaikh）[8)] 一族の記録文書に残る売買証書に含まれていた。それは1559年にブハラでムハンマドが不動産をジュイバーリー一族の成員に売買したことを記録し、また彼の父ミラクについてはすでに死亡していると触れている。フマーユーンの墓の建設は３年か４年後（1561-62年か1562-63年）まで着工されなかったので、ミラクは従ってその建造者であるはずがない」[8)]。

ミラクではなかったものの、フマーユーンの墓廟を構成する庭園はミラクの直系であり、インドに残る最も純粋なチャハール・バーグの要素を有していると考えられる。だが、ここで注意しなくてはならないのは、その庭園は純粋な要素を有すると同時に、墓廟と組み合わせるという新しい様式を組み入れていることである。そのため、元来のチャハール・バーグとはまた異なっていて当然である。

かつては、チャハール・バーグにある建築物としては、園亭もしくは宮殿の分館であった。庭園は愉悦の場所であり、あるいは農学実験場などの機能を果たしていた〔Subtelny　1997：110〕。それがこの時から墓という機能を追加されたのである。以後、墓廟と庭園を組み合わせた「庭園墓廟」は注目され、皇族の他ムガルの有力貴族達もこぞって造営するようになる。この庭園墓廟は、その所有者の存命中から着工されており、完工後は愉悦と憩いの場所として用いられ、所有者が死亡すると園内に置かれた分館が墓廟の役を果たした〔Crowe et al.　1972：71〕。例えば、シャー・ジャハーンの娘ロウシャン・アーラー Rausyan Ala Begum やアウラングゼーブの娘ジナト・アル・ニサ Zinat al-Nisa Begum の庭園墓廟がそれにあたる〔Blake　1991：62〕。この庭園墓廟が広まった背景には、アクバル下での相続税徴収システムと関係があったと分析されている〔Crowe et al.　1972：71〕。

大体ここまでがミラク、あるいはイルシャード・アル・ズィラーアに直接関係を見ることのできる庭園の限界と考えられる。

まとめ

ムガル朝の庭園の系譜は明らかとなったが、様式の形成過程を考察することについては具体的な例を挙げることが現段階では不可能であり、甚だ不満が残る。今後は特にティムール以後のサファヴィー朝ヘラートに視線を向け、また可能であればミラクの庭園を調べ、より詳細に様式の形成過程を追うことを続けてみたい。

注

1）Moynihan　1979: 3より引用訳出。
2）Subtelny によれば Irshad al-zira' a の49ページにある。
3）Koch　1979: 140 より引用訳出。
4）ヤムナー川のことだと思われる。間野氏が『バーブル・ナーマの研究』で集めた底本にもجون（Jūn）とある。
5）Qaisar　1988: 3 より引用訳出。
6）「バーブルはそれをグル・アフシャーンと名付け、その中に切り出した赤い石で小さな建物を建てた…、ジャハーンギールは敬愛する王妃ヌール・ジャハーンにグル・アフシャーンを譲り、彼女はバーブルの設計を変更することに躊躇しなかった」〔Moynihan　1979: 102〕。
7）Nath　1982: 224より引用訳出。
8）ブハラを中心としたナクシュバンディー派の一族。「ジュイバル」とは、水路管督人の意〔Foltz　1998: 97〕。
9）Subtelny　1999: 114より引用訳出。

参照文献

Blake, Stephen P.1991 *Shahjahanabad: The Sovereign City in Mughal India,* 1639-1739, Cambridge, Cambridge Univ. press, (Cambridge South Asian Studies)

Crowe et al. 1972 *The Gardens of Mughal India,* London, Thames and Hudson

Foltz.R.C, 1998 *Mughal India and Central Asia*, Korach, Mas printers

Golombek.L,and Wilber.D. 1988 *The Timurid Architecture of Iran and Turan* Vol.1, Princeton, Princeton Univ. Press

Koch, Ebba. 1991 *Mughal architecture: an outline of Its history and Development 1526-1858*, Munich, Prestel

Moynihan.E.B, 1979 *Paradise as A Garden in Persia and Mughal India*, New York, George Braziller, Inc.

Nath, R. 1982 *History of Mughal Archtecture Vol.1, New Jersey*, Humanities Press. Inc.

Koch Ebba. 1997 "The Mughal Waterfront Garden", Attilio Peruccioli, ed., *Studies in Islamic Art and Architecture*, Netherlands, Leiden, Koninklijke Brill, pp.140-160

Ruggles.D.F. 1997 "Humayun's tomb and garden: Typologies and visual order", Attilio Peruccioli, ed., *Studies in Islamic Art and Architecture,* Netherlands, Leiden, Koninklijke Brill, pp.173-186

Subtelny. M.E. 1997 "Agriculture and the Timurid Charbag: The Evidence from a Medieval Persian Agricultural Manual", Attilio Peruccioli, ed., *Studies in Islamic Art and Architecture*, Netherlands, Leiden, Koninklijke Brill, pp.110-128

Qaisar. A. J. 1988 *Building Construction in Mughal India: the evidence from painting*, New Delhi, Oxford University Press

蒲生禮一　1972 『世界歴史叢書・イラン史』修道社

小松久男編　2000 『中央ユーラシア史』（新版世界各国史４）　山川出版社

間野英二　1997 『中央アジアの歴史』（新書東洋史８）　講談社

バーブル　1998 『バーブル・ナーマ』（バーブル・ナーマの研究３　間野英二訳注）　松香堂

ブルックス、ジョン.，1989 『楽園のデザイン　イスラムの庭園文化』（神谷武夫訳）　鹿島出版会

リシュアン・ケーレン編　1998 『遥かなるサマルカンド』（杉山正樹訳）原書房